

十六把と壺

馬場・原

絵：野口宣友



その昔、今の馬場地区は法勝寺尾崎城のお殿様のお帰りを迎える土地で、「おかえりなさい」という言葉がなまって「岡入の里」と呼ばれました。この里に祖母の峯と2人で暮らすおゆきという娘がいました。おゆきは近くの原に住む善佑という元気で利発な若者と相思愛の仲でした。ある日、善佑は峯におゆきとの結婚を許してもらおうとおゆきの家を訪れると、峯に結婚について一つ条件を出されました。峯は「一把の藁を玄関前の台座に出しておくから、それを3日の間に十六把に出来たら、おゆきをお前にやる」というのです。うしろから条件を満たせるのか分からず、善佑は困りはてました。

答えが出ぬまま3日が過ぎ、善佑が家で鬱々としてしていると、父の徳十郎が庭や玄関に散らかったくわとほうきを見て大声で怒鳴りました。「善佑！庭のほうきをしまっておけ！それから、くわを納屋へ片付ける」善佑はそれを聞いて「あゝあ、庭のつぎはくわか…：にわとくわか…：あつ！これだ！」とひらめきました。善佑は原からおゆきの家へと駆けて行き、峯に「台座に置いてある藁は一把、家の前には庭（二把）、納屋にはくわ（九把）がああますだ。全部足すと十二把じゃ」と自信たっぷりに言いました。すると峯は「十六把にはあと四把足りんの」と言います。おゆきが善佑を心配そうに見やると、善佑は峯の顔をしげしげと見つめ「わかりました！おばあちゃんの顔にしわ（四把）があります。これを十二把に足すと十六把。出来ました」問題を解いた善佑はおゆきとの結婚を許されました。

ある晩秋の頃、原へみすばらしい身なりの菖蒲坊という名の行脚僧がたずねてきて、一晩泊めてくれと頼みました。菖蒲坊はひどく不気味な風体をしており、誰もが家に泊めるのを嫌がりました。しかし、善佑夫婦と徳十郎はすんなりと菖蒲坊を家に泊めて手厚くもてなしました。するともてなしに感謝した菖蒲坊が「なんのお礼もできませんが、拙僧の気持ちです」と3人に小さな壺を差し出しました。壺の中には小さな紙切れが一枚入っており、「善善一処一壺」と記してありました。菖蒲坊は「この紙に向かつて、たった一つだけ願いを言う」と叶えてくれる」と言うので、すうっとごごへともなく姿を消してしまいました。



おしまい